令和４年度　第１回佐賀県学力向上対策検証･改善委員会における主な意見

R4.8.29

【全国学力・学習状況調査について】

○　課題となっている「目的に応じて、資料から適切に情報を読み取る力」に関して、授業の中で取り組んでいることと全国学力・学習状況調査（以下「調査」）でその力を発揮することとのつなぎの部分が弱いと思う。

○　調査の時には、どのようにして目的に応じて情報を読み取るのか、問題文の中の言葉と問いの中にある言葉とを照合して作業していく。その学び方を小学生の段階から教える必要がある。

○　資料から読み取れる内容を一つ一つ積み上げていくボトムアップ的な考え方も大切だが、逆に、目指す答えから逆算して考えていくことも一つの方法ではないか。

○　要点をつかめるようになるには、メモを取る習慣を付けることも大切である。メモを取る際は、どこでメモを取る必要があるのかなど、メモの取り方なども指導してほしい。

○　課題の提出に関して、プラスのフィードバックをすることで、自己肯定感や学びに向かう力を育むことにつながっていく。小学校では自主学習ノートへ「よく頑張ったね」等のコメントが入っているのを見るが、中学校も含めてもっと、児童生徒にプラスのフィードバックをすることが大切である。

【学力向上関係の取組について】

○　データから見える自己肯定感の低さは小・中学校だけのことではなく、乳幼児期から感じる。この時期の状態が、小・中学校の時期に大きく現れているのではないか。幼・保・小の連携を更に密にし、幼稚園や保育園の先生方へも今回の調査の課題を伝えていく必要があると思う。

○　子どもと先生との信頼関係ができていると、自己肯定感や感性の醸成につながっていくと思う。親が子どもの話に耳を傾けることで、お互いの信頼関係につながっていく。

○　家庭での過ごし方や宿題を頑張った子どもに対し、プラスのフィードバックを行うことが、その後の頑張りや自己肯定感の醸成へとつながるのではないか。

○　子ども達は日常生活の中で、特に身近な大人から学ぶことが多い。その関わりからこんな大人になりたいという希望も生まれる。市町単位で、子どもと大人がしっかりと関われるような取組が必要ではないか。